



人工光で栽培されているレタス(京都府亀岡市で)

# 工場で「ブランド野菜」

野菜栽培会社のスプレッド(京都市)は4月、京都府亀岡市の野菜工場で作った「ベジタス」ブランドのレタス3

レッドを経営する野菜即会社、トレード(京都市)の稲田信二社長は「スーパーや百貨店が産地との直接取引を増やしており、卸の将来に危機感があった」と野菜生産に乗り出した理由を説明する。

## 京都府

亀岡市はもとも水の良い地として有名で、葉の形など見た目が美しいだけでなく、どこを食べても軟らかく、味の良いレタスが育つという。野菜独特の臭みやえぐみも少ない。

稲田社長は「事業を軌道に乗せるには、必要のある品種を生産することが必要だ」と強調する。冬の鍋シーズンに向けて11月以降、水菜、菊菜の販売を始める予定で、トマトやキュウリなどの生産方法の開発に取り組み考えた。(大阪経済部・岸本英樹)

農家の高齢化、安い海外産食品との競争、飼料や肥料などの原材料高と農業を取り巻く環境は厳しくなる一方だ。経営の効率化を図るため、農家がハイテクで武装する取り組みが広がっている。

経済 全国

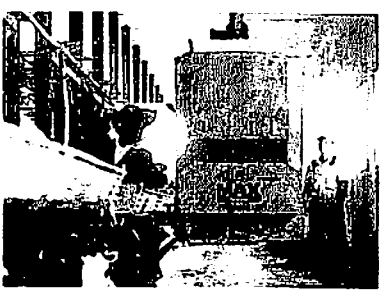
## ハイテクで 未来型農業

乳牛72頭を飼育する北海道滝川市の鶴田牧場では、牛舎の天井からぶら下がる巨大な金属製の「箱」を使って、牛乳の質を高め、コストダウンを果たしている。

## 北海道

郎社長(58)は、「少頭ずつ飼育をやる仕組みのため、牛は常に新鮮な牧草を口にできる。牛の体調に応じて頭の置や回数を柔軟に変えることができ、牛の健康状態は常に良好に保たれる」と強調する。実際、鶴田牧場の乳牛は、今夏開かれた地元の商品評会で、上位を独占した。

機械の導入費用は1000万円を超えるが、「もう一人、人を雇うよりも割安」と鶴田さん。人手のかかる給餌の時間が大幅に短縮されたこともあり、「飼料価格の急騰で経営は必ずしも楽でないが、早めに効率化を図った結果、厳しい環境下でもなんとか収支が取れている」と話す。(北海道支社・西沢隆之)



牛舎の中で自動給餌機を使う農家(北海道滝川市で)

## 機械で給餌、コスト減

気温などの計測装置(三重県熊野市で、J.A.三重南紀提供)



研究に協力している三重大学の岡孝治教授は「装置が進化すれば、どの農家でも名人レベルのミカンを生産できるようになると、自信満々だ。(中部経済部・戸塚光彦)

## 三重県

「おいしさ」数値で管理 三重県熊野市は、極品生ミカンの産地として知られる。ミカン名人と称されるれ、多すぎれば甘みが薄れ、少なすぎると実が育たない。7月、気温や日照時間、土壌中の水分などを測定する装置が設置された。測定データをパソコンで表示する「見える化」し、品質のばらつきをなくすのが狙いだ。測定装置は、地元の農協「J.A.三重南紀」が設置した。遠隔操作できるカメラも取り付けられており、果実の熟れ具合や病害虫の発生状況なども監視できる。

確保した。工場野菜はコストが高くなりがちだが、蛍光灯の使用を電気代の安い深夜に限定するなどして、小売価格は露地物の1.2〜1.3倍に抑えている。稲田社長は「事業を軌道に乗せるには、必要のある品種を生産することが必要だ」と強調する。冬の鍋シーズンに向けて11月以降、水菜、菊菜の販売を始める予定で、トマトやキュウリなどの生産方法の開発に取り組み考えた。(大阪経済部・岸本英樹)